

はじめに・・・。

この話はほぼ実話（さすがに債務者の名前とかがわかる様なものは出せませんので、登場人物はすべて仮名）です。平成9年夏、私は一人の女性（塩原）から「県道の拡幅工事予定地近隣に土地の出物があるが、手付金が足りないので貸して欲しい。」と言われ、6回にわたり計210万円を貸し付けました。

しかし、この金は高利の貸金業者（俗に言われるサラ金）から借り入れたものだったので、その女性が私に対し支払いを滞らせれば私が自腹を切らなければならないことに気付かなかったのです。

そして、彼女は失踪・・・。

そこから悪夢のような日々が始まったのです。

第1回 「そして借金が残った」

その日の朝。私の職場の電話が鳴った。

「私、東野ともうしますが、岡山さんいらっしゃいますか？」と、電話口で聞き慣れない名前と声で私の名を呼んだ。

「私ですが・・・。」と、答えると、男はこう切り出した。

「クレジット約束の東野ですが、今月入金遅れているんですよね。いつ入金されるのですか？」

「えっ・・・はい。何とかしますんで、2日位待ってもらえませんか」

「わかりました2日後までには入金されるのですね。」

「はい。」

「では、お願いしますよ。」

こんなやり取りが毎日6回も続いていた。そして、塩原の自宅にPHSで電話を掛ける。留守番電話になっている。携帯は・・・駄目だ電源が切られている。

職場の上司や同僚の冷たい視線を感じる・・・。平静を装っているがこう毎日じゃ隠し通せない。この問題を自力で解決しないと・・・。と、思っていた。

その夜、愛車のアルトを塩原の自宅へと向けた。

自宅の郵便受けや扉には督促状や新聞の山、これは・・・と思い近所に聞き込みをした。

「すみません、その塩原さんの奥さんですが・・・。」と、私が訪ねると・・・。

「昨日あたりから多いのよね。こういう人が・・・。塩原さんの奥さんなら1週間近く見ていないわね。」

『だまされたのか、私は・・・。』その場で私は絶句してしまった。

「残ったのは払うあてのない借金だけか・・・。」何とも言えない絶望感が私を襲った。

自宅には帰れない・・・。そこから、恋人が入院していたので、その病院に看護するといっては泊まり込んだり、ひどい時には千曲川の河川敷に車を止めて寝たり、職場の応接セットにスーツの上着を布団代わりにして寝ていたこともあった。

そして、数日。実家から PHS に H 信販から電話があったとの電話があり、N 信販の担当者が職場に一般来客を装って来た。そして、矢のような電話攻撃。冷静を装ったが、内心はボロボロになっていて、仕事のミスは増大した。

実際、この時頭の中に有るのは金のことばかり、目の前に印紙がついた申請書類があり、「この印紙を全部剥がして、金券屋に転売すれば少なくともこの地獄から抜け出せるのに・・・。」と思ったことは何度となくあった。

しかし、それをやれば間違いなく犯罪である、私は無意識に持っていた印紙剥離液に気付き、それから慌てて手を離したことが何度かあった。

そして、決定打となったのは、債権者であるサラ金屋が督促の電話を入れてくる時に「T の藤田ですが・・・。」などと業者名を出されてしまった。

結局、職場にはすべてがばれてしまい、正直言って『終わったな』と思った。

自宅へ帰った私は引きこもり翌日には職場へ出勤する気力さえ萎えてしまった。

「おい、岡山。」

その声に、顔を上げた。そこには労組の副支部長の S さんがいた。

私が引きこもり欠勤した事や職場に掛かってくる借金取りからの電話。そういったことから、心配をしてくれたのである。

彼は私を必死に励ましてくれた。そして、彼はこう言った「逃げるな。逃げなければ何とかなる。」と。

弁護士に介入して貰うことのメリット、デメリット。そして、万が一自己破産しても公務員の立場は失わないことを説明してくれた。

実際、この時には S さんが仏に見えたのである。もし、この時罵られるだけ罵られていたら、恐らく今の私はないと言っても良いだろう。

ともあれ、ここから私の再建が始まっていたのである。